

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19320021

研究課題名(和文) 兜率天往生の思想とかたち

研究課題名(英文) Form and Thought for Reborn to the TOSOTSU-TEN Heaven

研究代表者

泉 武夫 (IZUMI TAKEO)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40168274

研究成果の概要(和文)：兜率天上の弥勒菩薩の造形について、インドから日本中世までの展開過程をおおよそ明らかにした。中国唐代までは持水瓶・交脚形が主流であるが、宋代およびその影響を受けた日本中世では持塵尾・跏趺形が浸透する。また兜率天浄土の表現についても、中央アジアから中国、日本に至る図様形成と変容状況を遺品から跡づけた。とくに日本中世の兜率天曼荼羅図のタイプを整理することができた。

研究成果の概要(英文)：This project could make it clear how the form of MIROKU BOSATSU (Bodhisattva Maytreya) changed from the ancient India to the medieval Japan in the history of Buddhist Arts. And it can be pointed out that the pictures of TOSOTSU-TEN where MIROKU should be had been depicted many times according to the thought for reborn to there in each region and Buddhist faith.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2008年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2010年度	2,500,000	750,000	3,250,000
総計	10,200,000	3,060,000	13,260,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：美術史 宗教学

## 1. 研究開始当初の背景

(1)中央アジア、中国、朝鮮半島、日本へと伝播した弥勒信仰は、仏教思想の重要な柱のひとつである。その美術については、菩薩形、半跏思惟像、如来形などの像容別に、種々の研究がなされてきたが、兜率天にいる弥勒の形象の全体的な展開過程は必ずしも明らかにされていなかった。兜率天は、未来に仏陀となってこの世に出現するまで弥勒がいる場所であり、そこでは菩薩形の姿で常に説法をしていると経典に説かれている。

インド依頼の像容は、転法輪印かまたは水瓶を持つ交脚座であるが、中国になると交脚

座は次第に減少し、上半身も条帛をつけただけの姿から全体を羯磨衣で覆う着衣法に変化し、坐法や持物も変化すると予想される。その展開過程が課題のひとつである。

(2)日本中世に盛んに制作された兜率天宮図ないし兜率天曼荼羅図は、弥勒経典の所説を図示したもので、弥勒経変ないし弥勒浄土図とも呼べるものである。古代にはわずかな文献例しか残されていないのに対し、中世には遺品が多くなる。この作品群についても、ほとんど系統的研究がなされていなかった。

とくに兜率天宮にいる弥勒菩薩の図像的

展開や、そのルーツについてはまったく手つかずの観を呈していた。その未開拓の領域について、造形的側面から総合的に研究する必要が痛感されていた。

## 2. 研究の目的

(1)本研究は、古来より信仰があった弥勒の造像造画活動のなかでも、弥勒上生信仰とその造形との関係に焦点を絞り、とくに兜率天曼荼羅図（弥勒上生経変）の図様形成と兜率天説法の弥勒図像との関係、ならびに兜率天往生思想との学術的関連を探ることを目的とする。

(2)なかでも未解明な兜率天曼荼羅の形成過程、ならびに曼荼羅と往生思想とがどのようにリンクしているのかという問題をメイン・テーマとし、中国・朝鮮半島から日本におよぶ兜率天の弥勒菩薩像の展開と、それに関連する弥勒造像状況の分析をサブ・テーマとする。これらを有機的に関連づけることによって、兜率天往生の思想・信仰と新たな私たちの展開を研究、考察する。

## 3. 研究の方法

(1)研究方法は、現地調査においては実際の作品を調査し、絵画の場合は構図や図像・モチーフを記録する。記録に当たっては、デジタル・カメラ撮影を中心とし、また国内では赤外線デジタル・ビデオカメラ（浜松ホトニクス製のシステム）を併用して燻染や摩滅した画面の墨線による輪郭を抽出する。撮影された画像はCD-Rに保存する。調査時には詳しい作品調書を取り、技法および表現に関する観察所見を蓄積する。彫像の場合も赤外線デジタル・ビデオカメラ以外は同様に行う。記録画像は大容量のHDDにバックアップをとっておく。特定の重要作品についてはX線撮影を行い、技法や色料についての分析を行う。

(2)資料収集・分析においては、良質の写真資料ならびに関連する図版が掲載された書籍、研究テーマに関連の学術書籍を入手し、あわせて分析を行う。また万一、調査対象作品の現地調査が困難となった場合も、できる限り良質画像資料の取得に努め、調査の欠を補う。

## 4. 研究成果

(1)敦煌および河西回廊に残る兜率天弥勒の遺例を現地調査し、兜率天宮の図様の変遷をたどることができた。また西夏期の大規模な弥勒経変の図様を確認することができた。

インドに発生した兜率天上の弥勒という造像テーマは、ガンダーラやカーピシー出土の遺品から、簡略な天宮図のなかに転法輪印や持水瓶形で交脚する図像に表される。亀茲

などの中央アジアの遺品はこの図像を踏襲するが、天宮とその諸尊表現は規模が大きくなり、一部は抽象的な表現もみせるようになる。いっぽう、中国河西回廊では、最初はインド・中央アジアの図像を採り入れて描かれるが、隋から初唐以降、弥勒経変図が発達し、弥勒下生図の上端部に弥勒上生図すなわち兜率天を表すように絵画表現が複雑化する。

やがて盛唐以降、兜率天の表現が多様化するとともに、弥勒菩薩も上半身裸形から羯磨衣形、交脚坐から結跏趺坐へと変化し、宋代には持扇形が登場するようになる。こうした図像の変化は、日本にもたらされた清凉寺釈迦胎内納入の版画弥勒像や、鎌倉時代以降に多く描かれる兜率天曼荼羅図中の弥勒像に影響を与えていたのである。

(2)朝鮮半島における弥勒上生信仰ならびに下生信仰の遺跡を踏査し、半跏思惟像が弥勒と結びつく意義および、山岳地における弥勒仏像の遺例を確認することができた。

朝鮮半島では、仏教伝来の早い段階から百済に弥勒寺が営まれるなど、弥勒信仰が流布していた。その姿はやがて半跏思惟形として普及する。百済瑞山磨崖仏や新羅断石山磨崖仏などの遺例がそれを示しているが、兜率天上の弥勒という意識が明確化した初期造像は確認できない。それに対して、後の高麗時代以降には、戴帽型の特異な弥勒如来立像が流布する。なかには足下に飛雲を伴うものもあり、下生像として造像されたとみなされるが、その意味付けについてはなお検討を要する。

(3)日本中世における兜率天曼荼羅図の遺例のほとんどすべてを調査し、調書を作成するとともに写真撮影、赤外デジタル・カメラ撮影等により、貴重な画像を収集することができた。

従来ある程度、鎌倉時代以降の兜率天曼荼羅すなわち弥勒上生経変（弥勒浄土図）の存在は知られていたが、総合的調査はほとんど手つかずのままだった。今回、京都興聖寺本、大阪延命寺本、東京国立博物館衝立本（旧広島明王院本）、滋賀成菩提院本、岐阜誓願寺本、大阪個人蔵板絵などの遺例を現地調査し、詳しい観察と撮影、調書の取得を行った。

とくに興聖寺本は現存遺例中もっとも早い作例で、横長斜め構図という中国の類例にない特徴をもつほか、浄土の基壇に雲母を多く用いるという点でも独特の表現をとる。さらに兜率天弥勒の図像は、宋代に形成された持扇・羯磨衣形であり、日本中世に新しく形成された新様弥勒である点でも重要な作例であることがわかった。裏書には、もと貞慶の所持本であると記されていることから、鎌倉初期の弥勒信仰の新思潮と同調す

ることが想定され、今後さらなる分析が必要との認識に至った。

中世の遺品には、延命寺本のように興聖寺と同じ斜め型を採用する例もあるが、ほかには中国的な正面型であり、弥勒の図像もあまり統一的なまとまりがない。兜率天(弥勒浄土)の図様にも、経典の所説に基づく共通要素はみられるものの、細部表現はそれぞれ個性的で、阿弥陀信仰における当麻曼荼羅(観無量寿経変)のような主導的図様がついに形成されなかったと思われる。これは弥勒と阿弥陀の造形的側面における大きな違いである。

(4)資料の分析から、日本中世の弥勒信仰のあらたな展開が、おもに笠置寺貞慶と高山寺明恵によって推進されたことの意義を分析し、具体的な兜率天および兜率天上の弥勒に対するイメージを再構築する手掛かりを得ることができた。その弥勒の形象は、中国宋代になって形成された弥勒像に基づくことが判明した。

この時期の弥勒信仰の新思潮のカギを握る人物は笠置寺の貞慶であることが、資料研究から改めて浮かび上がった。貞慶は学識豊かな南都僧でありながら、笠置寺に隠遁し、晩年はさらに海住山寺に移り住んだ。多数の講式を残し、生涯を通じて弥勒信仰を保持していた。貞慶の信仰は、最終的には兜率への往生を断念し、観音の引導を望む結果になったが、弥勒信仰関連の述作は当代において抜きんでており、彼が与えた影響はきわめて大であった。造形にも種々関与しており、今後はその全体像の把握が課題となっている。

(5)以上の諸内容を、研究成果報告書『兜率天往生の思想とそのかたち』としてまとめ、刊行した。

当該報告書には、4本の論文を収め、あわせて日本中世の兜率天曼荼羅図の遺例すべて、すなわち京都興聖寺本、大阪延命寺本、東京国立博物館衝立本(旧広島明王院本)、滋賀成菩提院本、岐阜誓願寺本、愛知密蔵院本、大阪個人蔵板絵の図版を掲載した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- (1)泉武夫、兜率天弥勒と兜率天宮図の系譜、科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書「兜率天往生の思想とそのかたち」、査読無、2011、pp.3-49、
- (2)長岡龍作、兜率天往生の思想と表象、科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書「兜率天往生の思想とそのかたち」、査読無、2011、pp.51-70、

(3)シュワルツ・アレナレス ローレル、日本の建築空間と庭園—明治から20世紀初頭にかけての欧米におけるその受容と普及—、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター年報、査読無、7号、2011、pp.14-19、

(4)シュワルツ・アレナレス ローレル、Le ciel des Dieux satisfaits (Tusita) – Une entrée par l’Occident –(弥勒菩薩と兜率天～西洋からのアプローチ～)、科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書「兜率天往生の思想とそのかたち」、査読無、2011、pp.97-137、

(5)海野啓之、弥勒彫像荘厳具にみる平安後期・鎌倉時代の弥勒信仰・醍醐寺三寶院弥勒菩薩像光背における空間的位相、科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書「兜率天往生の思想とそのかたち」、査読無、2011、pp.71-96、

[学会発表] (計1件)

(1)泉武夫、平安後期から鎌倉前期の仏教儀礼における図像・画像の役割—可視と不可視の間で—、研究集会：前近代の日本における法会・儀礼の多面的解明—ことば・ほとけ・図像—、2011.5.12、ロンドン大学 SOAS、

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

泉 武夫 (IZUMI TAKEO)  
東北大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：40168274

(2) 研究分担者

長岡 龍作 (NAGSOKA RYUSAKU)  
東北大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：70189108

シュワルツ・アレナレス ローラ (LAURE  
SCHWARTZ ARENALES)

お茶の水女子大学・比較日本学研究センター・准教授

研究者番号：20377013

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：